

諏訪の鉄道開業120周年に思い寄せる



駅長時代の写真や新聞記事スクラップを見返しながら思い出を語る藤森勝己さん

25日はJR中央東線青柳―岡谷駅間が開業して120周年。記念日を前に各駅で記念イベントが行われたほか、諏訪市博物館では記念特別展も開かれている。諏訪を走る鉄道網の歴史は、先人たちの努力で切り開かれてきた。「昔は鉄道が運輸の大部分を担っていて、今と違って何があっても動かさなければならなかった。いい、悪いの話じゃなくてね」。富士見、岡谷両駅などで駅長を務めた藤森勝己さん(80)―諏訪市赤羽根―は、感慨深そうに振り返る。(杉本哲也)

昔は運輸の大部分担う

節目祝い、安全運行の次代願う

た。当初は機関士志望だったが視力が弱く諦め、駅の業務に従事。松本車掌区勤務時代は貨物担当として、塩尻駅を起点に東奔西走した。

藤森さんは線路が近くを通る家で生まれ育ち、幼少期から迫力の音と振動を伝える蒸気機関車に心を奪われた。諏訪実業高校卒業後、上諏訪機関区の臨時職員に。約60年間にわたる鉄道人生はかま磨きからスタートし、その後信濃境駅で国鉄職員として採用され茅野駅での旅客助役などを経て、今年2月で80歳になったのを機に仕事を辞めたことで、改めて「鉄道は自分の人生そのものだった」と感じるようになった。諏訪地方の両端で駅長を務めた経験から、地元が線路で結ばれた節目を祝いたい―との思いは人一倍だ。自宅には、懐かしさとともに激動の時代を支えた鉄道員としての自負がにじむ。



岡谷駅長時代の藤森勝己さん

かつてと違い、現代は安全運行最優先で列車の運休は珍しくない。気象情報などから事前に計画運休が示されることもある。藤森さんはそんな時代の流れを当然と受け止める。鉄路を支える後輩たちにエールと感謝の思いを込め、「乗客乗員の安全を念頭に、さらに100年、200年と鉄道の歴史をつないでいってほしい」と願っている。